

## 最近こんなことを考えました

森 下 一 期

現在の子ども・青年を取り巻く文化状況について、中西新太郎さんの講演を聞いたとき、あらためて注意を喚起されたことがあります。それは、「誰でも、どこでも」といった項目でしたが、現代ではみなが同じものをどこでも手に入れられるようになっているということです。マンガ、ゲーム、……。その普及率は100%に近いものもあるそうです（「ポケモン」のゲームソフトの出荷本数累計が900万本、小学校中学年から中学1年までの子どもの総人口が約670万人とのこと。——同氏近著『思春期の危機を生きる子どもたち』。この中で中西さんは、「「ポケモン」を知らない子どもはいない、という状況はその意味で仲間外れの恐怖を高めています」と指摘しています——）。

近年、重厚長大産業の単一の大量生産から多品種少中量生産になったとして、消費者のニーズに細かに対応した多様化がなされてきていると言われてます。でも、その一方で、先の子どもの文化状況に見られるような、みな平等であるけれども「画一的」な現象が現れていることは見逃してはならないように思います。

この「誰でも、どこでも」という中から、排除されることへの「恐怖」が生み出されるということは、その遊びは子どもたちが心から打ち込み、喜びを感じるものではないのではないか、という面があることを示しています。もちろん、子どもによる受け

止め方の違いがあるでしょうが。

“誰でも、どこでも”自体は否定されることはないでしょうが、そこから“恐怖”が生まれるとしたら、“誰でも、どこでも”、これを言い換えれば誰にとっても“平等”であることが持つ問題性に目を向けなければならぬということのように思います。つまり、“誰でも、どこでも”であっても、自分なりの楽しみ方があるような多様性をもたせることが大切ですし、むしろ、“誰でも、どこでも”できないような、自分たちしか出来ないものもあってよいように思います。

手労研の課題とかかわらせると、自然の素材に働きかけることは無限の多様性、言い換えれば個々人に対応したものとなり得るし、自分なりの喜びと満足が得られるように思うのですがいかがでしょうか（もっとも、一律の到達目標を与えたら、苦痛を生み出すでしょうが）。今一つ、それぞれの子どもの生活の中にある素材、モノにかかわることがもっと追求されてよいように思います。それらは全国一律ではありません。いわゆる地域に目を向ける、といったこともこの文脈で大切であるように思います。そして、“みんなが同じことを”、があってもよいですが、選択的な視点、子どもにより興味関心は違うし、違っていいのだ、ということ相互に了解しあうことが大切だと思います。（今回、全体的なことは考えられませんでした）